

「漱石と広島」の会 会報

第18号

「漱石のつどい」二宮 比治山大 准教授 が講演

第4回「夏目漱石のつどい」を令和5年11月25日、広島市中区のJMSアステールプラザで開いた。二宮智之比治山大准教授が「漱石・交友と作品―岩国と中村是公」として講演した。(石田信夫＝世話人)

是公は、広島市佐伯区五日市の出身だが、岩国の中村家に養子に行き、今の東大に進んだ。漱石とは入学前に知り合い、終生の友となった。

是公は満鉄総裁など官僚のエリートコースを進み、漱石は人気小説家となった。真反対の道に進んだ2人は、満州で交差する。是公が、漱石に満州について何か書いてほしいとの思惑を込めて招いたか

らだ。

漱石はこれに応じ、紀行文を『満韓とところどころ』として朝日新聞に連載する。

二宮准教授はこうした経緯をたどりながら、世俗的な成功をした旧友と漱石と

「満韓とところどころ」の舞台裏

旧友の満鉄総裁がお膳立て

中村是公は夏目漱石の同級生です。南満州鉄道会社(満鉄)実質的な植民地満州の経営をする国策会社)の総裁であったり、鉄道院の総裁であったり、東京市長であったりした人です。

出身は五日市(広島市佐伯区)の柴野という造り酒屋でしたが、跡取りではありませんでした。尋常中学校を出て、上京します。

漱石との縁は、明治19(1886)年



2024年(令和6年)
2月20日発行
「漱石と広島」の会

の関係の変化を読み解いていった。

ほかに錦帯橋を詠んだ一句に潜む謎を深めた。また岩国沖で沈んだ潜水艇の佐久間勉艇長の遺書をめぐって、自然主義文学に違和感を持っている漱石の心情をなぞった。

講演に先立ってフリーパーソンナリティー玉田陽子さんによる『夢十夜』の朗読があった。

出席者は48人。うち会員は20人だった。会のイベントは、令和元年の「漱石と広島」出版記念会以来、コロナ禍を経て4年ぶり。集いは7年ぶり。

9月頃。2人が教師のアルバイトをする江東義塾という塾の寄宿舎で共同生活を始めてからです。是公は明治23年、つまり東京大学に入学した年に岩国の旧庄屋、中村家に養子に入りますが、この時はまだ漱石も塩原姓だったので、それぞれに事情があったということですね。

卒業後は大蔵省に入った。その後台湾に渡り、後藤新平に見出されてその下で働くようになります。その後、後藤は満

鉄の初代総裁になります。後藤は大風呂敷というか、非常に大きなグラントデザインを書いたことで知られますが、その後をうまく収めてくれる人がいない。そこで中村がいんじやないかと言われ、その後金に入っていきます。

満鉄の総裁になったのは明治41年。その頃に漱石に連絡があって、ちよつとこちらで仕事するんだけど、いろいろやらんかというふうなことだったようです。亡くなったのは昭和2年で、貴族院議員でした。

ということで『永日小品』に収められている『変化』です。新聞連載ですので短い文章です。

「二人は三疊敷きの二階に机を並べていた」といきなり始まり、まだ2人が誰かというのとは分らない。しかし24年前の江東義塾の様子ですね。3疊の部屋でも布団を敷いて寝られないことはない、と机を並べていたようです。そこで勉強もしていた。

部屋の内が薄暗くなると、寒いのを思ひ切つて、窓障子を明け放つたものである。其の時窓の真下の家の、竹格子の奥に若い娘がぼんやり立つてある事があつた。静かな夕暮杯は其の娘の顔も姿も際立つて美しく見えた。折々はあゝ美しいなと思つて、しばらく見下してみた事もあつた。けれども中村には何にも言はなかつた。中村も何にも言はなかつた。

ということ、中村の名前が出てきます。

次ページへ続く

知られざる漱石と岩国の縁について話す二宮准教授

